



TITLE:

# 中日書目比較考 -- 『隋書』 經籍志 の書籍情報を巡って--

AUTHOR(S):

榎本, 淳一

---

CITATION:

榎本, 淳一. 中日書目比較考 -- 『隋書』 經籍志の書籍情報を巡って-- 東  
洋史研究 2017, 76(1): 37-78

ISSUE DATE:

2017-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/252394>

RIGHT:

# 中日書目比較考

——『隋書』經籍志の書籍情報を巡って——

榎 本 淳 一

はじめに

一、寫本時代の書籍 —— 本稿の視角 ——

二、『隋書』經籍志の書籍情報はいつのものか

三、遣隋使の將來漢籍

おわりに

## はじめに

書目、すなわち書籍の目録（本稿では主に宮廷圖書の目録を指す）は、「知の座標」とも稱されるように、その時代の學術の總體を捉え、各分野の學問の來歴を解き明かす、謂わば空間と時間という座標軸を用いて、書籍一つ一つを分類し、位置（意義）<sup>(1)</sup>づける役割を果たした。書目は學術の動向・意義を正しく理解する上で有用なものであり、それ故、中國においては、書目自體を研究對象とする目録學という學問を發達させた。<sup>(2)</sup>

これまでの書目研究や目録學においては、學術・書籍の分類法や學術分野の發展狀況など書目の總體的な比較検討は行われているが、著録された個々の書籍の記載情報の比較に基づいた考察はあまり行われておらず、書目の史料としての活

用に未だ不十分な點があるように思う。

本稿は、中國の代表的な書目の一つである『隋書』經籍志に著録された書籍の記載情報を取り上げ、これと唐代の書目である『舊唐書』經籍志・『新唐書』藝文志や日本古代の書目『日本國見在書目録』とを比較検討し、『隋書』經籍志の書籍情報の年代、及び日本の遣隋使の將來漢籍の特定という從來未解決であつた問題に解答を試みるものである。

## 一、寫本時代の書籍 —— 本稿の視角 ——

### (一) 寫本の特性

書籍は、古くは竹木・布帛に書かれる時代があり、やがて紙に書寫される寫本の時代、そして紙に印刷される版本の時代に移り變つた。大まかにいって、西晉から唐末・五代くらいまでは寫本の時代と考えてよく、本稿で検討する『隋書』經籍志・『舊唐書』經籍志・『新唐書』藝文志・『日本國見在書目録』は、皆、寫本時代の宮廷圖書の目録である。即ち、これらの目録に著録された書籍とは、全て寫本であつた。書目の比較をするにあつては、そのことを十分理解した上で検討する必要がある。

書籍が寫本であることは、その性質に大きな特徴を與えた。複製の困難さは、その一つである。寫本時代の書籍は全て手書きであるため、その書き寫しには多大な手間がかかり、容易に複製することはできなかった。紙墨など書寫材が高價であつたことも、複製をより困難にした。そのため、書籍の流通も自ずと少量とならざるを得なかった。量的な稀少さに加え、傭寫代や紙墨代など製作費が高額であつたこともあり、書籍は寶物のように貴重視された。そのため、書籍は祕藏されるものとなつたが、その最たるものは宮城の奥深くの祕閣（祕府）に藏された宮廷圖書であつた。宮廷圖書を披覽できたのは、皇帝及びその許可を得た一部の官僚と、祕書省や集賢院など宮廷圖書を管理する部門の官吏に限られた。<sup>(3)</sup> 書籍

の獨占は知識・情報の獨占到他ならず、支配の上でも好都合であつたことは言うまでもない。

寫本時代の書籍の特性として、もう一つ觸れておかねばならないのは、テキストの改變度、振幅の大きさである。手書きの常として、誤寫、書き落とし、竄入・衍入を免れることはできず、書寫を重ねれば重ねるほど、誤りの多いテキストを生み出すことになった。また、轉寫の過程で後人が書き入れた注記や見解などが原文と識別不能となつて本文化したり、抜き書きや要約という形で原文が改變されたりすることもあり、原本とはかなり異なるバリエーションをもつた寫本<sup>11</sup>異本が多く作られることになった。更に、寫本に缺卷が生じた際には、別の系統の寫本によつてその缺を補う取り合わせ本という異本のパターンもあつた。こうした異本の廣がりも、寫本時代の特徴的な現象であつた。テキストが原文からかけ離れてゆくことは、學術の基礎を搖るがすことに他ならず、寫本の嚴密な校讎・校訂は學者・文人の最も重要な責務となつた。その校訂が最も徹底して行われたのが宮廷圖書であつた。當代一流の學者を動員して、信賴できるテキスト（正本・證本）の確定が行われたのである。また、その時代の國家的な編纂物（敕撰書など）の原本や、名のある學者・文人により皇帝に獻上された著作の原本が、宮廷圖書に加えられた。<sup>4</sup> 原本及び正本によつて構成された宮廷圖書は、その時代の學術の精華でもあつた。

## （二）宮廷圖書の聚散と變成

學術の正統は宮廷圖書によつて受け繼がれる部分が大きかつたが、この宮廷圖書は度々災厄に見舞われた。所謂「書厄」である。隋の祕書監牛弘の説いた「書の五厄」がよく知られているが、①秦始皇帝の焚書坑儒、②新末の叛亂による宮廷圖書の消失、③後漢末の動亂による宮廷圖書の散佚、④西晉末の永嘉の亂による宮廷圖書の滅失、⑤梁末の西魏軍攻圍に際しての宮廷圖書の燒燼、という五厄に限らず、王朝交替など政治的な變動の度に混亂・戦火によつて宮廷圖書が大打撃を受けた。<sup>5</sup> 本稿で取り上げる隋朝の宮廷圖書も、隋末・唐初の戦亂とその後の水没事件により、ほぼ壊滅したと

される。水没事件とは、武德五年（六三二）に、戦火・掠奪を逃れた東都洛陽の書籍約八千餘卷を長安に船で移送する途上、黃河の難所底柱山附近にて水没させてしまった事故である。<sup>(6)</sup>この後も、安史の亂、唐末五代、宋元交替、元明交替、明清交替などの際にも宮廷圖書の災難は續いた。<sup>(7)</sup>しかし、版本の時代となった宋代以降は、書籍の流通量が増えたことにより、書籍そのものが亡くなってしまおうという不幸は幾分少なくなった。寫本時代は流通する範圍が狭く、流通する量も少なく、宮廷圖書にしか存在しない書籍もあったことから、宮廷圖書の消滅は、書籍そのものの消滅になってしまいうケースも稀ではなかった。

宮廷圖書の壊滅は學術のみならず王朝の正統性喪失の危機と捉えられ、王朝交替時に喪われた宮廷圖書の復舊を新王朝は重要な使命とした。新王朝は民間に流布・留存していた書籍を可能な限り集めたが、民間から集めた書籍の多くは原本・正本と大きく異なる異本であり、校合し修訂する必要があった。隋朝では、牛弘の進言によって、高い報賞を與えることで民間からの蒐書を大々的に行つたことが知られる。<sup>(8)</sup>隋朝のみならず、各王朝では、かなりの苦心・努力をかけて宮廷圖書の復舊事業を行つたが、しかし、前王朝時代の宮廷圖書と全く同じものを復原することは容易ではなかった。その證據に、前王朝の書目に存在した書籍が新王朝の書目には存在しなかったり、存在しても卷數や書名など異なるものが少なくなく、宮廷圖書の構成・内容に少なからざる違いが生じていたことが知られる。例えば、『隋書』經籍志・史部・雜史に、「魏尚書 八卷 孔衍撰」が著録されているが、その書の梁代の卷數は「梁十卷」と注記されている。『舊唐書』經籍志では「後漢（魏の誤りか）尚書 十四卷 孔衍撰」とあり、『新唐書』藝文志では「（孔衍）後魏尚書 十四卷」と記されている。即ち、梁朝、隋朝、唐朝でそれぞれ卷數が異なり、隋唐間では書名も少し變わっていることが確認できる。卷數の變化は、王朝交替毎に書物の中身が大きく變わつたことを示す。有能な學者たちが苦心慘澹して校訂・修復しても、民間流布本（異本）をもとに前王朝時の書籍を復原することが困難であつたことが分かる。

### (三) 書籍の書寫時代の判別

寫本時代の書籍の特性と宮廷圖書の王朝毎の變化について述べて來たが、そのことを踏まえ、時代または國の異なる宮廷圖書の目録を比較することで、目録に掲載された書籍の書寫時代（王朝）を推定できることについて述べたい。その主たる考え方・方法は以下の通りである。

まず、ある王朝の書目にしか見えない書籍については、その書籍は基本的にはその王朝の時代に作製されたものと考え得る。王朝交替時に宮廷圖書が湮滅した際、新王朝では復原不可能な書籍も存在したことを上述したが、前王朝の書目のみ見えて、新王朝の書目では消えてしまった書籍がそれに該当する。例えば、『隋書』經籍志にのみ著録されていた書籍で、『舊唐書』經籍志及び『新唐書』藝文志などに見えない書籍は、隋唐交替時に喪われた隋代の著作ないし寫本と考えてよいだろう。因みに、隋代の著作は、隋朝の存續期間が短かったため、民間への流布が限られたので、宮廷圖書の消失がそのまま書籍そのものの消失につながるケースが多かったと推測される。なお、ある王朝の書目にしか見えない書籍の中には、それ以前の王朝で製作された寫本であつたにも関わらず、それ以前は宮廷圖書に加えられていなかっただけというものも存在する可能性はある。そのようなケースはあまり多くはないと思われるが、その時代の著作ないし寫本であるという傍證があつた方が、時代を特定する上でより確實であることは言うまでもない。

次に、卷數から書寫時代を判別する考え方・方法について説明する。上に述べたように、宮廷圖書の卷數の變化は王朝交替時に發生することが多く、原本を同じくする書籍であっても、王朝毎に卷數が異なることが少なくない。逆の見方をするならば、原本を同じくする書籍でありながら卷數が異なれば、その寫本が書寫された時代（王朝）が異なるといふことになる。従つて、書籍の卷數記載に着目することにより、それがどの時代（王朝）の寫本なのか、が判別できるということである。また、同じ卷數のものを辿つてゆくことによって、その寫本系統の祖本の成立時代（王朝）を推定すること

もできる。巻数が同じであれば、全く同内容であつたということにはならないが、内容構成に親近性が高く、寫本系統の同一性が高いと考え得るからである。何巻本という巻数が寫本の系統を知る上で重要な判断材料であることは廣く知られているが、唐で善本の入手に苦心した吉備眞備も宮廷圖書と同じ系統の寫本を求める際に、寫本の巻數に注目していたことが知られる。<sup>9)</sup>

書目を比較する上では、書名や撰者名の違いにも注意を拂う必要がある。寫本の變化を窺い知る手がかりになる場合もあるからである。しかし、書名が變更されていても、寫本の内容に相違が無い場合もあり、他の徴證と併せて慎重に判断する必要がある。

以上に説明した書籍の存続状況、巻數の變化・連續性に主に着目し、また書名・撰者名にも留意しながら、次章以下で隋・唐・日本の書目を實際に比較し、『隋書』經籍志の書籍情報に關わる二つの問題について考えることにしたい。

## 二、『隋書』經籍志の書籍情報はいつのものか

### (一) 問題の所在

『隋書』經籍志は、『漢書』藝文志に次ぐ正史收載の圖書目錄であるが、四部分類や子目の設定など分類の基準を定める重要な役割を果たし、その後の目錄學に大きな影響を与えたとされる。<sup>10)</sup> そのため、關聯研究も多く、『隋書』經籍志の様々な問題が考究されてきているが、未だ解明・決着されていない問題も存在する。<sup>11)</sup> これから取り上げる『隋書』經籍志の書籍情報も、その一つである。

『隋書』經籍志の書籍情報がいつの時代のものか、という問題は意外に思われるかもしれないが自明ではない。單純に考えれば、『隋書』だから、隋の時代の書籍の情報が記載されているということになるが、『隋書』經籍志が作成された唐

初の書籍情報が記されているという説も存在している。この説は、内藤湖南が「支那目錄學」で「これは隋書についた經籍志であるが、書籍の現在は唐の時の現在である」と述べたことに始まり、日本では現在でも通説となっている。<sup>(12)</sup>

これに對し中國では、余嘉錫が『隋書』經籍志は隋の大業年間の目錄（大業正御書目錄）を底本として作成されたと論じており、唐代に増減を加えたとしても、基本的には隋代の書籍情報を記していると理解しているようである。<sup>(13)</sup> 中國では近年の研究でも余嘉錫の説が繼承されており、内藤説など異論は取り上げられていないように思われる。<sup>(14)</sup>

内藤説と余説の孰れが正しいのか、『隋書』經籍志の基本的性格に關わる重要な問題でありながら、日本、中國それぞれで論じられてきたためか、またどちらも論據を示さぬ簡略な言及であつたためか、未だ議論の俎上に載せられたことはないようである。内藤・余兩説の是非を検討するにあたり、次節では、『隋書』經籍志の編纂過程について確認しておきたい。

## (二)『隋書』經籍志の成り立ち

『隋書』經籍志は、元々『隋書（隋朝史）』五十五卷とは別に編纂された『五代史志』三十卷の一部として成つたものである。<sup>(15)</sup> 武德四年（六二二）、令狐德棻の建議により梁・陳・北齊・北周・隋の五朝史の編纂が行われることとなり、翌年から編纂が開始された。しかし、編纂が滞り、成書に至らなかつたため、貞觀三年（六二九）から改めて五朝史の編纂が再開された。貞觀十四年（六四〇）（貞觀十年とする史料もある）、五代史（五朝史）は『梁書』・『陳書』・『齊書』・『周書』・『隋書』として漸く完成奏上されるが、本紀・列傳のみで、志を缺くものであつた。そのため、貞觀十五年（六四一）に于志寧・李淳風・韋安仁・李延壽らに志の追修が命じられ、令狐德棻、次いで長孫無忌が監修にあたつた。顯慶元年（五六）に『五代史志』十志・三十卷は撰上され、『隋書』に編入された。このような成り立ちから、『隋書』經籍志は、『隋書』の一篇でありながら、五朝の經籍志という性格を有することになつたのである。ただし、實際には、梁朝と、隋



朝もしくは唐朝初期（經籍志編纂當時）の宮廷圖書の目錄情報しか記載されていない。

『隋書』經籍志の具體的な編纂の仕方については、その總序に記されている。以下に、關係する部分のみ抜き出し、内容のまとまりに應じて改行し、その行頭に番號を附す。

①大唐武德五年、僞鄭を克平し、盡く其の圖書及び古跡を收む。司農少卿宋遵貴に命じて之を載するに船を以てし、河を浜り西上し、將に京師に致さんとす。行きて底柱を經るに、多く漂没せられ、其の存する所の者は、十に一、二なり。其の目錄も亦漸濡する所と爲り、時に殘缺有り。

②今見存を考へ、分けて四部と爲し、合條して一萬四千四百六十六部、八萬九千六百六十六卷有り。

③其の舊錄の取るところ、文義淺俗にして、教理に益無き者は、竝びに之を刪去す。其の舊錄の遺すところ、辭義采るべきにして、益を弘むるところ有る者は、咸な附入す。遠くは馬史・班書を覽て、近くは王・阮の志・錄を觀て、其の風流の體制を挹み、其の浮雜鄙俚を削り、其の疏遠なるを離し、其の近密なるを合はせ、文を約し義を緒ぎ、凡そ五十五篇、各本條の下に列し、以て經籍志を備ふ。

④未だ能く研幾探賾し、幽隱を窮極せずと雖も、庶はくは道を弘め教へを設け、以て遺闕無かるべきことを。夫れ仁義禮智は、國を治むる所以なり。方技數術は、身を治むる所以なり。諸子は經籍の鼓吹爲り、文章は乃ち政化の黼黻、皆治を爲すの具なり。故に之を此の志に列すと云ふ。

引用部分の内容は大凡四つに分けることができ、①は隋朝の宮廷圖書及びその目錄の傳存（逸失）狀況、②は經籍志編纂時における唐朝の宮廷圖書の狀況、③は經籍志の編纂方針、④は經籍志の編纂目的・意義について、それぞれ述べている。

まず最初に注目すべきこととして、①に記されたように、經籍志編纂にあたって、隋朝の宮廷圖書の現物は殆ど残っておらず、現物を見て編纂することはできなかったということである。<sup>16)</sup>なお、②に記された書籍情報は、隋朝の宮廷圖書の

殘存狀況を示すものではなく、武德五年以降、經籍志編纂が行われた貞觀十四年頃までに唐朝が書籍の蒐集・整理を行った結果を示すものである。<sup>17)</sup>

次に着目したいのは、①に記す「目錄」である。この「目錄」は、移送された隋朝の宮廷圖書に附隨したものであり、經籍志編纂時に隋朝の宮廷圖書の目錄が殘存していたことを示す。底柱山附近での水没事件の際に、水に濡れ、闕損を生じた箇所もあるようであるが、水没を免れたことは確かであり、經籍志編纂の際にこの目錄が參照された蓋然性が高いと思われる。なお、この「目錄」が具體的には隋代の宮廷圖書目錄の何れを指すのか、またどの程度殘存したのか、については慎重に判斷する必要がある。

更に注意したいのは、③に見える「舊錄」である。一定の方針の下、「舊錄」に加除することで經籍志が編纂されたことが記されており、「舊錄」が經籍志の底本となつてることが明示されている。この「舊錄」がどのようなものか、具體的な説明は無いが、文脈からして、①に記された「目錄」と同じものである蓋然性が高い。余説では、この「舊錄」を隋朝の宮廷圖書目錄である『大業正御書目錄』と想定しているわけだが、内藤説のように「舊錄」を單に「舊來の目錄」「昔の目錄」と解する餘地もあり、この總序の記載だけから斷定するわけにはいかないだろう。

以上の『隋書』經籍志の編纂過程から確認できることは、編纂當時に隋朝の宮廷圖書の目錄が現存し、編纂に利用されたことが想定されるということである。問題は、その目錄がどの程度殘存していたか、である。ごく部分的な殘存であれば、隋朝の宮廷圖書の現物も無い以上、唐朝が新たに蒐集・整理した書籍の情報を中心に編纂されたということになり、内藤説が正しいということになるだろう。底本にするに足るだけの殘存狀況であればその隋朝の殘存目錄を基に『隋書』經籍志が編纂されたことになる。ただし、そのことは、余説のように『大業正御書目錄』が底本とされたということまでは意味せず、他の隋朝の宮廷圖書目錄である可能性もあり、別に検討する必要がある。また、隋朝の書目を利用したとしても、③の編纂方針に示されるように、隋代の情報削除や唐初の情報追加など改變を加えたことが明らかである以上、そ

れがどの程度の改變であつたかについても考慮しなければならない。これらの問題の解決のため、『隋書』經籍志にどの程度隋代の書籍情報が反映しているのか、次節以下で検討することにした。

### (三) 比較の前提と方法

『隋書』經籍志に掲載された書籍の情報が、隋代のものか、唐初のものかを明らかにするために、『隋書』經籍志と唐代の書目である『舊唐書』經籍志・『新唐書』藝文志との書籍情報の比較を行う。この比較の前提として、唐初から『舊唐書』經籍志の底本となつた『古今書錄』が編纂された開元年間までの期間には、宮廷圖書が「書厄」等の激甚な被害を蒙ることで書籍情報に大きな違いを生じることには無かつたということがある。唐初に比べ開元期の方が藏書數が遙かに多いことは間違いないが、基本的に唐初の書籍情報に新たな書籍情報が上積みされただけで、唐初に存在した書籍の情報が改變されることが多くあつたとは思われない。<sup>(18)</sup>従つて、『隋書』經籍志の書籍情報と『舊唐書』經籍志等唐代の書目の書籍情報を比較し、兩者の親近性・類似性が高ければ、『隋書』經籍志の書籍情報は唐初のものを主としてしていると推定できるだろう。逆に親近性・類似性が低ければ、隋代の書籍情報により『隋書』經籍志を編纂したと考え得るだろう。なお、『新唐書』藝文志が何に據つて書籍情報を記したか不明だが、安史の亂後の書籍情報が含まれていることは確實であり、亂により大きく變貌した宮廷圖書の狀況を記している可能性があるので、『新唐書』の情報は參考に留めるのが無難と考える。<sup>(19)</sup>

比較の方法だが、『隋書』經籍志に掲載されている全ての書籍を比較對象とするのではなく、『隋書』經籍志に著録されている隋代の著作に限つて、『舊唐書』經籍志等と比較することにした。その理由としては、まず、全ての書籍情報を逐一比較することは煩瑣であり、全體像の把握も容易ではないということがある。二つ目の理由としては、隋代以前に著された書籍は比較の對象から外した方が、より明快な結果を導き出せると考えるからである。隋代以前の著作の中には、その寫本が廣く社會に流布していて、隋末に宮廷圖書が喪われた後も民間から善本を見出すことが可能なケースもあつたと思わ

れる。その場合には、隋朝の宮廷圖書が喪われたとしても、唐朝の宮廷圖書にも殆ど同じような書籍が再現し得ることになる。それ故、宮廷圖書の喪失の有無に關係なく、『隋書』と『舊唐書』に同じ書籍情報が記載されてしまうことになり、宮廷圖書喪失の影響の有無を見出し難くなってしまう。その點、隋代の著作であれば、書籍の成立後間もないため、民間への流布は限定的であり、宮廷圖書の喪失がそのまま書籍の喪失につながることが多かつたものと思われる。また、書籍の寫本全てが無くならないまでも、善本・完本の發見ができず、不完全な形でしか書籍の復原ができない場合も少なかつたのではないかと推測される。即ち、隋代の著作の場合には、宮廷圖書喪失の影響が明瞭に現れるものと考え得るということである。従つて、『隋書』經籍志が隋代の書籍情報に基づき編纂されたならば、より明確に唐代との書目との違いが確認できるものと思われる。逆に、唐代の書目との違いが少なければ、唐代初期の情報に基づいたと推定できるであろう。

#### (四) 『隋書』經籍志と『舊唐書』經籍志との比較

「表1・『隋書』經籍志に見える隋代の著作」は、『隋書』經籍志に掲載された隋代の著作の書籍情報と『舊唐書』經籍志、『新唐書』藝文志、『日本國見在書目録』それぞれの對應する書籍情報を一覽できるように表にしたものである。隋代の著作と認定するにあたっては、『隋書』經籍志の記載の他、興膳宏氏・川合康氏・池田溫氏の研究<sup>(20)</sup>、そして『隋書』本紀・列傳の記述等を参照した。

表1 『隋書』經籍志に見える隋代の著作

四部	四十類	『隋書』經籍志	『舊唐書』經籍志	『新唐書』藝文志	『日本國見在書目録』	備考
I. 經	1. 易	『周易并注音』 7卷 『周易講疏』 13卷	『周易講疏』 13卷	『周易』講疏』 13卷	『周易講疏』 12卷	祕書學士陸德明撰 國子祭酒何安撰



				II. 史				
14 霸史	13 雜史	12 古史	11 正史	10 小學	9 讖緯			
『帝王世紀』 4卷	『齊志』 10卷	『梁後略』 10卷	『漢書音義』 12卷 『漢書音』 12卷 『范漢音』 3卷 『梁書帝紀』 7卷 『後魏書』 100卷 『周史』 18卷	『俗語難字』 1卷 『四聲指歸』 1卷 『韻英』 3卷 『訓俗文字略』 1卷 『古今字圖雜錄』 1卷 (38部439卷)	『論語講疏文句義』 5卷 『論語義疏』 2卷 『爾雅音』 8卷 『廣雅音』 4卷 『五經正名』 12卷 『五經大義』 5卷 『江都集禮』 126卷			
				(14部325卷)	『爾雅音』 6卷 (江灌注) 『五經正名』 15卷 『江都集禮』 120卷 『俗語難字』 1卷 (李少通撰)			
				(14部293卷)	『爾雅江灌』 音 6卷 『五經正名』 12卷 『隋江都集禮』 120卷 李少通『俗語難字』 1卷			
				(8部25卷)	『江都集禮』 126卷 『四聲指歸』 1卷			
虞綽撰	後齊事。王劭撰	姚勛撰 紀後齊事。崔子發撰	國子博士蕭該撰 廢太子勇命包愷等撰 蕭該撰 姚察撰 著作郎魏彥深撰 未成。吏部尚書牛弘撰	祕書少監王劭撰 劉善經撰 釋靜洪撰 後齊黃門郎顏之推撰 祕書學士曹憲撰	徐孝克撰、殘缺 張沖撰 祕書學士江灌撰 祕書學士曹憲撰 劉炫撰 何妥撰			



Ⅲ. 子									





36 五行	『仁壽二年七曜曆』 1卷 『七曜曆經』 4卷 『七曜曆疏』 5卷 『晷漏經』 1卷 『風角』 7卷 『風角要候』 1卷 『風角鳥情』 2卷 『太一飛鳥立成』 1卷 『遁甲立成法』 1卷 『陽遁甲用局法』 1卷 『地形志』 87卷 『地形志』 80卷 『相經要錄』 2卷 『甄氏本草』 3卷 『寒食散對療』 1卷 『黃帝素問』 8卷 『論病源候論』 5卷 『本草音義』 3卷 『本草音義』 7卷 『備急單要方』 3卷 『釋道洪方』 1卷 『經心錄方』 8卷 『淮南王食經并目』 165卷 『帝王養生要方』 2卷 『四海類聚方』 260卷 『四海類聚單要方』 300卷	『七曜曆疏』 3卷 『風角鳥情』 2卷 『遁甲立成法』 3卷	『七曜曆疏』 3卷 『風角鳥情』 2卷 『遁甲立成法』 3卷	『飛鳥立成』 2卷 臨孝恭撰 儀同臨孝恭撰 （蕭吉撰？） 臨孝恭撰 臨孝恭撰 庾季才撰 庾季才撰 蕭吉撰*傳では1卷 （甄權撰？甄立言撰？） 釋道洪撰 全元起注 吳景賢撰、目1卷 姚最撰 甄立言撰 許澄撰 （釋道洪撰？） 宋俠撰 大業中撰、（諸葛類撰 蕭吉撰 （煬帝撰？）
----------	---	--------------------------------------	--------------------------------------	--

IV. 集	38. 楚辭別集	〔楚辭音〕1卷 〔梁蕭琮集〕7卷 〔陳後主集〕39卷 〔陳後主沈后集〕10卷 〔陳沙門釋靈裕集〕4卷 〔煬帝集〕55卷 〔武陽太守盧思道集〕30卷 〔金州刺史李元操集〕10卷 〔蜀王府記室辛德源集〕30卷 〔太尉楊素集〕10卷 〔懷州刺史李德林集〕10卷 〔吏部尚書牛弘集〕12卷 〔司隸大夫薛道衡集〕30卷 〔國子祭酒何妥集〕10卷 〔祕書監柳晉集〕5卷 〔開府江總集〕30卷 〔江總後集〕2卷 〔記室參軍蕭愨集〕9卷 〔著作郎魏彥深集〕3卷 〔著作郎諸葛穎集〕14卷 〔劉子政母祖氏集〕9卷 〔著作郎王胄集〕10卷 〔文選音〕3卷 〔文章始〕1卷 〔大隋封禪書〕1卷	〔楚詞音〕1卷 〔陳後主集〕50卷 〔沙門靈裕集〕2卷 〔隋煬帝集〕30卷 〔盧思道集〕20卷 〔李元操集〕22卷 〔李德林集〕10卷 〔牛弘集〕12卷 〔薛道衡集〕30卷 〔何妥集〕10卷 〔柳顧言集〕10卷 〔江總集〕20卷 〔蕭愨集〕9卷 〔魏澹集〕4卷 〔諸葛穎集〕14卷 〔王胄集〕10卷 〔文選音〕10卷 〔續文章始〕1卷	〔楚辭音〕1卷 〔陳後主集〕55卷 〔靈裕集〕2卷 〔隋煬帝集〕30卷 〔盧思道集〕20卷 〔李元操集〕22卷 〔李德林集〕10卷 〔牛弘集〕12卷 〔薛道衡集〕30卷 〔何妥集〕10卷 〔柳顧言集〕10卷 〔江總集〕20卷 〔蕭愨集〕9卷 〔魏澹集〕4卷 〔諸葛穎集〕14卷 〔王胄集〕10卷 〔文選音〕10卷 〔續文章始〕1卷	〔楚辭音義〕(?卷) 〔蕭琮集〕2卷 〔煬帝集〕28卷	釋道騫撰
	39. 別集					
	40. 總集					

- (凡例)
1. 本表は、『隋書』經籍志に著録された隋代の著作と、『舊唐書』經籍志、『新唐書』藝文志、『日本國見在書目錄』の對應書籍の書名と卷數を一覽表にまとめたものである。
  2. 備考の欄には、『隋書』經籍志に記載された注記及び撰者名を記した。同書に撰者名が記載されておらず、他書により撰者が推定される場合は( )内に撰者名を記した。
  3. 卷數が不明なものがある場合には、部の合計卷數、總計卷數の箇所に「+α」と表記した。

表に示したように、『隋書』經籍志に掲載された隋代の著作數は、總計百七十四部六千三百七十四卷となる。これに對應する『舊唐書』經籍志の書籍數は、八十四部四千七百六十二卷である。因みに、『新唐書』藝文志は八十八部四千八百九十七卷で、書籍數のみならず全體的に見て『舊唐書』との差異は少ない。

表1から、まず指摘できることは、『隋書』經籍志と『舊唐書』經籍志の部數の違いである。その差は九十部であり、隋代の著作の半數以上の書籍が唐開元期の宮廷圖書には存在していないことが分かる。更に、『隋書』と『舊唐書』とで卷數の異なる書籍は四十一部、書名ないし撰者が相違するもの(卷數が異なるものとの重複を除く。また、別集の書籍名で官職

總計				
174部 6374卷 目1卷	『上封禪書』 2卷 『樂府新歌』 10卷 『樂府新歌』 2卷 『七悟』 1卷 『霸朝集』 3卷 『皇朝詔集』 9卷 『皇朝陳事詔』 13卷 『梁魏周齊陳皇朝聘使雜啓』 9卷 (33部 394卷)	『七悟集』 1卷	『七悟集』 1卷	秦王記室崔子發撰 秦王司馬殷僧首撰 顏之推撰 李德林撰
84部 4762卷	(19部 266卷)	(19部 271卷)	『霸朝集』 3卷 (6部 63卷 + α)	
88部 4897卷				
28部 714卷 + α				

の有無は相違としない）は二十部を数える。兩者で食い違う書籍を總計すると、百五十一部に上る。即ち、『隋書』經籍志と『舊唐書』經籍志とは、前者のうちの八割六分以上の書籍情報に違いが存在している。この結果は、隋代の著作のほぼ五割が喪失し、三割六分が異本となったことを意味する。これほど大きな宮廷圖書の變化は王朝交替時の爭亂に由るものと考えられる他はなく、『隋書』經籍志の記載情報と『舊唐書』經籍志の記載情報の間に王朝交替があったことは間違いないものと判斷される。即ち、『隋書』經籍志は、隋末唐初の爭亂以前の宮廷圖書の情報を記載しており、隋代の宮廷圖書の目録を底本にしていると結論できるだろう。

次に指摘すべきこととして、『隋書』經籍志著錄の隋代の著作の情報が極めて廣範に記されていることである。經籍志全四十類中、記載の見られないのは、儒家、法家、名家、墨家、縱橫家の五類に過ぎず、底本となった隋代の目録の殘存狀況の良さを物語っているように思われる。隋代の著作が見えない五類についても、目録が闕けていたというよりも、實際に著作が無かった可能性もあり、この五類が隋朝の目録の闕落箇所と斷定するものではない。<sup>21)</sup> 經籍志の全體にわたって隋代の書籍情報が記されていることから、底本の隋朝の目録に大きな闕失は無かったものとみてよいだろう。

#### (五) 『隋書』經籍志の底本

隋代の宮廷圖書目録としては、『開皇四年四部目録』四卷、『開皇八年四部書目録』四卷、『香厨四部目録』四卷、『開皇二十年書目』四卷（『香厨四部目録』と同じか？）、『大業正御書目録』九卷が知られる。『隋書』經籍志を編纂するにあたって、これらの書目を參照したことは間違いないが、このうち、底本とされたのはどれであろうか。

底本の確定にあたり、着目したいのが、大業年間（六〇五―六一七）に成立した書籍である。「表2…大業年間に成立した書籍」は、大業年間に成立したことが確實な書籍の一覽表である。この表に挙げられた書籍の多くが『隋書』經籍志に著錄されていること、そしてそれらの過半のものが唐代の書目に見えないことを勘案するならば、『隋書』經籍志は大業

表2 大業年間に成立した書籍

成立年	書籍名	隋志	舊志	新志	成立年の典拠
大業2	長洲玉鏡	238			大業雜記
大業3	大業律	11	138		隋書煬帝紀、隋書刑法志
大業3	大業令	30			隋書煬帝紀
大業4	万物志	20			隋書許善心傳
大業5	淮南王食經	165			大業雜記、隋書經籍志
大業6	區宇圖志	129	120	135	大業雜記
大業6	諸病源候論			128	諸病源候論首題
大業9	靈異記	10			隋書許善心傳
大業12	水節圖經（水節圖？）	(20)			大業雜記
大業中	明堂圖議				隋書宇文愷傳
大業中	寶臺四法藏目錄	100			隋書經籍志
大業中	玄門寶海	120			隋書經籍志
大業中	桂苑珠叢		100		舊唐書曹憲傳
大業中	博雅		10	120	舊唐書曹憲傳
煬帝時	禮疏				舊唐書曹憲傳
煬帝時	古文尚書疏（尚書疏）				隋書褚輝傳
煬帝時	毛詩章句義疏	20			隋書顧彪傳
煬帝時		40			隋書魯世達傳

(凡例)

1. 本表は、隋朝の大業年間（六〇五―六一七）に成立したことが確實な書籍の成立年、書名、書目掲載卷數、成立年の典拠を一覽表にまとめたものである。
2. 表中の「隋志」の項は「隋書」經籍志の、「舊志」は『舊唐書』經籍志の、「新志」は『新唐書』藝文志の、該當書籍の卷數を記す。卷數の無いものは、その書籍が著録されていないことを意味する。

年間の書籍も記載した目錄を基に編纂されたことは確實である。大業年間の書籍も記載する目錄は『大業正御書目錄』のみと考えられ、これが底本とされたと考えられよう。

ここで少し『大業正御書目錄』について、觸れておきたい。『資治通鑑』煬帝大業十一年（六一五）正月條に「初め、西京の嘉則殿に書三十七萬卷有り。帝、祕書監柳顧言等に命じて詮次せしめ、其の複重猥雜なるを除かしむ。正御本三萬七千餘卷を得て、東都の修文殿に納む」とあるが、この嘉則殿の書籍三十七萬卷を整理して得られた「正御本三萬七千餘卷」の目錄が『大業正御書目錄』と考えられる。<sup>22)</sup>正御本は東都洛陽の修文殿に納められたことから、同目錄も一緒に修文殿に置かれたで

あろう。唐の武徳五年に、洛陽から長安に移送しようとした隋朝圖書は修文殿の書籍の一部と考えられ、それに附随していた「目錄」とは『大業正御書目錄』とみてよいだろう。『大業正御書目錄』には三萬七千卷餘の書籍が著録されていたわけだが、『隋書』經籍志の四部書の總數三萬六千七百八卷（實數は三萬七千二百卷<sup>(23)</sup>）と近似していることも、上記の推定を裏附ける。<sup>(24)</sup>卷數の誤差は、『隋書』經籍志の編纂時に「文義淺俗にして、教理に益無き者は、竝びに之を刪去す。其の舊錄の遺すところ、辭義采るべきにして、益を弘むるところ有る者は、咸な附入す」という改變が加えられたことや、水没事件の際の目錄の濡損に由るものと考ええる。

以上の検討・考察により、『隋書』經籍志の底本は、余嘉錫が説いたように『大業正御書目錄』であつたと認めてよいだろう。従つて、『隋書』經籍志に記された書籍情報は、基本的に隋代の書籍情報として扱つてよいことになる。

### 三、遣隋使の將來漢籍

#### (一) 問題の所在

『隋書』經籍志の書籍情報が基本的に隋代のものであることを論證したが、この結果を用いて、倭國（日本）の派遣した遣隋使が持ち歸つた漢籍を具體的に明らかにしたい。

遣隋留學生・留學僧は、歸國後、國博士に拔擢されるなど、留學で身につけた新知識を倭國の國制改革に生かしたことが知られる。留學生・留學僧も含め遣隋使がどのような知識をもたらしたのか、これまでは殆ど問題とされることがなかったが、この時代の政治や文化への影響を跡附ける上で重要な問題と考える。彼等の持ち歸つた漢籍を明らかにすることで、この問題を考察するための手がかりを得たいと思う。なお、佛典については、『隋書』經籍志等には個々の經典に關する情報が記載されていないため、検討の対象から除外することにした。

遣隋使のもたらした文物については池田溫氏の論考があり、漢籍についても取り上げられている。池田氏は、『日本國見在書目録』に隋代の書籍三十四件が著録されていることを指摘され、「その主要部分は入唐僧や遣唐使節により將來されたと推定され、遣隋使がもたらしたと確認し得るものはゼロである。但だ三四點<sup>(マ)</sup>のうちに遣隋使將來品が部分的に含まれる蓋然性は存する」と述べられている。池田氏は「遣隋使がもたらしたと確認し得るものはゼロである」とされるが、『隋書』經籍志の書籍情報を用いることで、遣隋使がもたらした徵證を得られるのではないかと考える。また、遣隋使は隋代の著作のみならず、隋以前の著作も將來した可能性もあると思われ、検討の対象を広げる必要があると思われる。次節以下において、『日本國見在書目録』と『隋書』經籍志や唐代の書目との對比を通じて、遣隋使の持ち歸った漢籍について検討することにした。

## (二) 遣隋使の持ち歸った隋代の著作

遣隋使が將來した漢籍には、大別して隋代の著作と隋代以前の著作の二種類があつたと思われる。まず最初に、隋代の著作から検討することにした。

前章で用いた表1には、『隋書』經籍志に著録された隋代の著作を列挙している。その中で、『隋書』經籍志と『日本國見在書目録』にのみ見えて、『舊唐書』經籍志及び『新唐書』藝文志に見えない書籍に注目したい。該當書を、以下に列挙する(本節での書籍名は、『日本國見在書目録』に従う。但し、『隋書』經籍志によって誤脱を修補したところがある)。

『四聲指歸』一卷・劉善經撰(小學家) 『隋大業令』三十卷(刑法家) 『靈異記』十卷(雜傳家) 『蕭瑄集』二卷(別集家) 〔隋書〕經籍志では七卷なので端本か) 『霸朝集』三卷・李德林撰(總集家)

これらの書籍が『舊唐書』・『新唐書』に見えないということは、中國においては隋末・唐初の戦亂で喪われた書籍と考えられ、唐代には存在しない書籍ということになる。そうした書籍が『日本國見在書目録』に著録されているということ



は、王朝交替の争乱以前に遣隋使が入手し、倭国（日本）に持ち歸った書籍である蓋然性が高いと言えよう。或いは、戦乱以前に入手した遣隋留學生等が、唐初に歸國した際に持ち歸った可能性も考えられる（以下、遣隋使には、この唐初に歸國した遣隋留學生等も含めることとする）。

隋代の著作ということでは、『隋書』経籍志には著録されていないが、『日本國見在書目録』にのみ見えるものがある。この場合の書籍は、撰者が隋代の人物であることから、隋代の著作と判断できるものであるが、『舊唐書』以降の歴代の書目にも見えないものについては、上記の書籍と同じように考えてよいものと思われる。

『孝經去惑』一卷・劉炫撰（孝經家） 『爾雅音決』三卷・釋智𪔐撰（論語家） 『急就章音義』一卷・釋智𪔐撰（小學家） 『要略』一卷・王劭撰（小學家） 『九族書儀』一卷・李德林撰（儀注家） 『四海姓望譜』一卷・劉昉等定（譜系家） 『藥蘭』三卷・甄立玄撰（醫方家） 『楊廣集抄』一卷（別集家） 『祖君彥集』一卷（別集家） 『記』一卷（別集家）

表1で、次に注目したいのは、『隋書』経籍志と『日本國見在書目録』で同巻数であるが、『舊唐書』経籍志・『新唐書』藝文志では巻数が異なる書籍である。即ち、隋末・唐初の争乱で隋代の著作の原本及びその寫本が喪われ、唐代に復原修訂されたものの、異本となってしまうた書籍を指す。『日本國見在書目録』著録の書籍が同巻数であるのは、隋代の原本系の寫本である蓋然性が高く、隋朝滅亡前に入手したものと推察される。同様に唐代以後には異本となったが、それ以前に入手したと思われるものとして、『隋書』経籍志と『日本國見在書目録』の書名が同じでありながら、唐代の書目では異なっている書籍も加えたい。該當するものは、以下の四書である。

『江都集禮』百二十六卷（禮家） 『范漢音』三卷・蕭該撰（正史家） 『後魏書』百卷・魏彥深撰（正史家）（『日本國見在書目録』に記す現在数は六十巻なので端本か） 『梁後略』十卷・姚弋仲撰（古史家）

なお、これ以外にも、『隋書』経籍志、『日本國見在書目録』、『舊唐書』経籍志、『新唐書』藝文志という四種の書目に

於いて、書籍情報が同一なものの中には、遣隋使が舶載した書籍が含まれている可能性もあるが、現状では見分ける術は無い。

### (三) 遣隋使の持ち歸った隋代以前の著作

ここで取り上げる隋代以前の著作とは、原作が隋代以前に著された書籍であつて、隋代に宮廷圖書等として寫本が存在したものを指す。隋代以前の著作で、遣隋使が持ち歸った書籍を推定するために、「表3…『隋書』經籍志と『日本國見在書目録』」の卷数が一致する隋代以前の著作」を作成した。表3は、『隋書』經籍志と『日本國見在書目録』に著録された隋代以前の著作で卷数が一致するもの、即ち同系統の寫本の可能性のある書籍を一覽表にまとめたものである。なお、同系統の寫本が唐代に存在したか否かを見るために、『舊唐書』經籍志及び『新唐書』藝文志の書籍情報も併記してある。

表3 『隋書』經籍志と『日本國見在書目録』の卷数が一致する隋代以前の著作

四部	四十類	『隋書』經籍志	『日本國見在書目録』	『舊唐書』經籍志	『新唐書』藝文志	備考
I. 經	1. 易	『周易』 10卷	『周易』 10卷	『周易』 10卷	『周易』 京房章句 10卷	漢魏郡太守京房章句
		『周易』 10卷	『周易』 10卷	『周易』 10卷	『周易』 王弼・韓康伯注 10卷	王弼・韓康伯注
		『周易音』 1卷	『周易音』 1卷	『周易論』 2卷	『阮長成・阮仲容難答論』 2卷	東晉太子前率徐邈撰 晉馮翊太守阮渾撰
	2. 書	『周易論』 2卷	『周易論』 2卷	『周易論』 2卷	『阮長成・阮仲容難答論』 2卷	漢臨淮太守孔安國傳
		『古文尚書』 13卷	『古文尚書』 13卷	『古文尚書』 13卷	『古文尚書』 孔安國傳 13卷	漢臨淮太守孔安國傳
		『古文尚書音』 1卷	『尚書音』 1卷			徐邈撰
		『尚書大傳』 3卷	『尚書大傳』 3卷			鄭玄注
		『尚書百釋』 3卷	『尚書百釋』 3卷	『尚書百釋』 3卷	『巢翁百釋』 3卷	梁國子助教巢翁撰

3. 詩	〔尚書義疏〕 10 卷 〔韓詩外傳〕 10 卷 〔毛詩〕 20 卷	〔尚書義疏〕 10 卷 〔韓詩外傳〕 10 卷 〔毛詩〕 20 卷	〔費昶義疏〕 10 卷 〔韓詩外傳〕 10 卷 〔鄭玄箋毛詩詁訓〕 20 卷 〔陸璣草木鳥獸魚蟲疏〕 2 卷	梁國子助教費昶撰 〔韓嬰撰〕 漢河間大傅毛萇傳、鄭氏箋 烏程令吳郡陸機撰
	〔毛詩草木蟲魚疏〕 2 卷	〔毛詩草木鳥獸魚蟲疏〕 2 卷	〔毛詩草木鳥獸魚蟲疏〕 2 卷	
4. 禮	〔周官禮〕 12 卷 〔周官禮義疏〕 40 卷 〔周官禮義疏〕 19 卷 〔周官禮義疏〕 10 卷 〔周官禮義疏〕 9 卷 〔儀禮〕 17 卷 〔喪服要略〕 1 卷 〔喪服譜〕 1 卷 〔禮記音〕 2 卷 〔琴操〕 3 卷 〔琴經〕 1 卷	〔周官禮〕 12 卷 〔周官禮義疏〕 40 卷 〔周官禮義疏〕 19 卷 〔周官禮義疏〕 10 卷 〔周官禮義疏〕 9 卷 〔儀禮〕 17 卷 〔喪服要略〕 1 卷 〔喪服譜〕 1 卷 〔禮記音〕 2 卷 〔琴操〕 3 卷 〔琴經〕 1 卷	〔周官禮〕 13 卷 〔周官義疏〕 40 卷 〔鄭玄〕注周官〕 13 卷 〔沈重周官義疏〕 40 卷 〔鄭玄〕注儀禮〕 17 卷 〔鄭玄〕注喪服要略〕 1 卷 〔鄭玄〕注喪服譜〕 1 卷 〔鄭玄〕注禮記音〕 2 卷 〔鄭玄〕注琴操〕 3 卷 〔鄭玄〕注琴經〕 1 卷	鄭玄注 沈重撰 〔撰者未詳〕 〔撰者未詳〕 〔撰者未詳〕 〔撰者未詳〕 鄭玄注 晉太學博士環濟撰 宋中散大夫徐爰撰 晉廣陵相孔衍撰 〔蔡伯諧撰〕
5. 樂	〔春秋左氏經傳集解〕 30 卷	〔春秋左氏傳〕 30 卷	〔杜預左氏經傳集解〕 30 卷	杜預撰
	〔春秋左氏傳音〕 3 卷 〔春秋釋例〕 15 卷 〔春秋公羊傳〕 12 卷 〔春秋公羊音〕 1 卷 〔古文孝經〕 1 卷	〔春秋左氏傳音〕 3 卷 〔春秋釋例〕 15 卷 〔春秋公羊傳〕 12 卷 〔公羊音〕 1 卷 〔孝經〕 1 卷	〔徐邈〕音 1 卷 〔杜預〕釋例〕 15 卷 〔春秋公羊傳〕 5 卷 〔古文孝經〕 1 卷	徐邈撰 杜預撰 嚴彭祖撰 孔安國傳、梁末亡逸、今疑非古本
6. 春秋	〔孝經〕 1 卷	〔孝經〕 1 卷	〔孝經〕 1 卷	鄭氏注
	〔孝經〕 1 卷	〔孝經〕 1 卷	〔孝經〕 1 卷	
7. 孝經	〔孝經〕 1 卷	〔孝經〕 1 卷	〔孝經〕 1 卷	
	〔孝經〕 1 卷	〔孝經〕 1 卷	〔孝經〕 1 卷	





18 儀注	『宋儀注』10卷 『新儀』30卷	『宋儀注』10卷 『新儀』30卷	『宋儀注』2卷 『雜儀』30卷	『宋儀注』2卷 『鮑泉新儀』30卷	〔撰者未詳〕 鮑泉撰
17 職官	『漢官儀』10卷 『職官要錄』30卷	『漢官儀』10卷 『職官要錄』30卷	『漢官儀』10卷 『職官要錄』30卷	『漢官儀』10卷 『陶彥藻職官要錄』36卷	應劭撰 陶彥藻撰
16 舊事	『漢武帝故事』2卷 『西京雜記』2卷	『漢武帝故事』2卷 『西京雜記』2卷	『漢武帝故事』2卷 『西京雜記』1卷	『漢武帝故事』2卷 『葛洪西京雜記』2卷	〔撰者未詳〕 〔葛洪撰〕
15 起居注	『穆天子傳』6卷	『穆天子傳』6卷	『穆天子傳』6卷	『穆天子傳』6卷	汲冢書、郭璞注
14 霸史	『華陽國志』12卷 『十六國春秋』100卷	『華陽國志』12卷 『十六國春秋』100卷	『華陽國志』3卷 『十六國春秋』120卷	『常璩華陽國志』13卷 『崔鴻十六國春秋』120卷	常璩撰 魏崔鴻撰
13 雜史	『王子年拾遺記』10卷 『趙書』10卷	『王子年拾遺記』10卷 『趙書』10卷	『王子年拾遺記』10卷 『趙石記』20卷	〔王嘉〕拾遺記』10卷 『田融趙石記』20卷	蕭綺撰 偽燕太傅長史田融撰 〔注④〕
12 古史	『齊書』100卷 『齊紀』20卷 『漢紀』30卷 『後漢紀』30卷 『宋略』20卷 『齊春秋』30卷 『梁典』30卷 『晉書鈔』30卷 『續帝王世紀』10卷	『齊書』100卷 『齊紀』20卷 『漢紀』30卷 『後漢紀』30卷 『宋略』20卷 『齊春秋』30卷 『梁典』30卷 『晉書鈔』30卷 『續帝王紀』10卷	『宋書』100卷 『齊紀』20卷 『漢紀』30卷 『後漢紀』30卷 『宋略』20卷 『齊春秋』3卷 『梁典』30卷 『晉書鈔』30卷 『續帝王代紀』10卷	『臧兢後漢書音』3卷 〔注③〕 『沈約宋書』100卷 『沈約齊紀』20卷 『荀悅漢紀』30卷 『袁宏後漢紀』30卷 『裴子野宋略』20卷 『吳均齊春秋』30卷 『何之元梁典』30卷 〔張緬〕晉書鈔』30卷 『何茂林續帝王代紀』10卷	陳宗道先生臧兢撰 〔注③〕 梁尚書僕射沈約撰 沈約撰 魏祕書監荀悅撰 袁彥伯撰 梁通直郎裴子野撰 梁奉朝請吳均撰 陳始興王諮議何之元撰 梁豫章內史張緬撰 何茂材撰

刑	20	21	22	23	24	三子
雜傳	『三輔決錄』 7 卷 『孝子傳』 10 卷	『黃圖』 1 卷 『洛陽宮殿簿』 1 卷 『遊名山志』 1 卷 『神異經』 1 卷 『三輔故事』 2 卷 『山海經圖讚』 2 卷	『七賢傳』 5 卷 『懷舊志』 9 卷	『七錄』 12 卷 (46 部 999 卷)	『晏子春秋』 7 卷	儒家
『三輔決錄』 7 卷 『孝子傳讚』 10 卷	『三輔決錄』 7 卷 『孝子傳讚』 10 卷	『竹林七賢傳』 5 卷 『懷舊志』 9 卷	『列女傳』 15 卷 『列女傳頌』 1 卷 『妬記』 2 卷 『名僧傳』 30 卷 『高僧傳』 14 卷 『列仙傳』 3 卷 『搜神記』 30 卷 『搜神後記』 10 卷	『七錄』 12 卷 (46 部 999 卷)	『晏子春秋』 7 卷	
『三輔決錄』 7 卷 『孝子傳讚』 10 卷	『三輔黃圖』 1 卷 『洛陽宮殿簿』 1 卷 『遊名山志』 1 卷 『神異經』 1 卷 『三輔故事』 2 卷 『山海經贊』 2 卷	『七賢傳』 7 卷	『列女傳』 2 卷	『七錄』 12 卷 (39 部 885 卷)	『晏子春秋』 7 卷	
『趙岐三輔決錄』 10 卷 『鄭緝之孝子傳讚』 10 卷	『孟仲暉七賢傳』 7 卷 『梁元帝』 懷舊志』 9 卷	『劉向列女傳』 15 卷	『虞通之』 妬記』 2 卷 『僧寶唱名僧傳』 20 卷 『僧惠皎高僧傳』 14 卷 『劉向列仙傳』 2 卷 『干寶搜神記』 30 卷	『三輔黃圖』 1 卷 『洛陽宮殿簿』 3 卷 『東方朔神異經』 2 卷 『郭璞』 山海經圖讚』 2 卷	『阮孝緒七錄』 12 卷 (41 部 946 卷)	『晏子春秋』 7 卷
漢太僕趙岐撰、摯虞注 宋員外郎鄭緝之撰	孟氏撰 梁元帝撰	劉向撰、曹大家注	虞通之撰 釋寶唱撰 釋慧皎撰《注⑤》 劉向撰、譙續、孫綽讚 陶潛撰	撰者未詳《注⑥》 謝靈運撰 東方朔撰、張華注 晉世撰 郭璞注	阮孝緒撰	齊大夫晏嬰撰

[illegible]



	28 墨家	29 縱橫家	30 雜家	31 農家
	『人物志』 3卷 『隨巢子』 1卷 『胡非子』 1卷 『鬼谷子』 3卷	『呂氏春秋』 26卷 『淮南子』 21卷	『金樓子』 10卷 『博物志』 10卷 『古今注』 3卷 『纂要』 1卷	『袖中記』 2卷 『物始』 10卷 『典言』 4卷 『子抄』 30卷 『類苑』 120卷 『華林遍略』 620卷 『聖壽堂御覽』 360卷 『內典博要』 30卷 『齊民要術』 10卷
	『人物志』 3卷 『隋巢子』 1卷 『胡非子』 1卷 『鬼谷子』 3卷	『呂氏春秋』 26卷 『淮南子』 21卷	『金樓子』 10卷 『博物志』 10卷 『古今注』 3卷 『纂要』 1卷	『袖中記』 2卷 『物始』 10卷 『典言』 4卷 『子抄』 30卷 『類苑』 120卷 『華林遍略』 620卷 『脩文殿御覽』 360卷 『內傳博要』 30卷 『齊民要術』 10卷
	『人物志』 3卷 『胡非子』 1卷 『鬼谷子』 2卷	『呂氏春秋』 26卷 『淮南商詁』 21卷	『金樓子』 10卷 『博物志』 10卷 『古今注』 5卷 『纂要』 6卷	『袖中記』 1卷 『物始』 10卷 『典言』 4卷 『子抄』 30卷 『類苑』 120卷 『華林遍略』 600卷 『修文殿御覽』 360卷 『內典博要』 30卷 『齊民要術』 10卷
	『劉劭人物志』 3卷 『隨巢子』 1卷 『胡非子』 1卷 『鬼谷子』 2卷 〔注⑩〕	『呂氏春秋』 26卷	『梁元帝金樓子』 10卷 『張華博物志』 10卷 『崔豹古今注』 3卷 『顏延之纂要』 6卷 之撰	『沈約袖中記』 2卷 『謝吳物始』 10卷 『李穆叔典言』 4卷 『庾仲容子抄』 30卷 『劉孝標類苑』 120卷 『徐勉華林遍略』 600卷 『祖孝徵等脩文殿御覽』 360卷 『虞孝敬』 內典博要 30卷 『賈思勰齊民要術』 10卷
	劉劭撰 巢、似墨翟弟子 非、似墨翟弟子 〔注⑩〕	秦相呂不韋撰、高誘注 漢淮南王劉安撰、許慎注	梁元帝撰 張華撰 崔豹撰 戴安道撰 亦云顏延之撰	梁綏安令徐僧權等撰 〔祖孝徵等撰〕 〔梁元帝または虞孝敬撰〕 賈思勰撰

32 小說家	『燕丹子』 1卷	『燕丹子』 1卷	『燕丹子』 3卷	『燕丹子』 1卷	丹、燕王喜太子
	『笑林』 3卷	『笑林』 3卷	『笑林』 3卷	『邯鄲淳笑林』 3卷	後漢給事中邯鄲淳撰
33 兵家	『世說』 10卷	『世說』 10卷	『續世說』 10卷	『劉孝標續世說』 10卷	劉孝標注
	『小說』 10卷	『小說』 10卷	『小說』 10卷	『殷芸小說』 10卷	梁武帝勅安石長史殷芸撰
34 天文	『司馬兵法』 3卷	『司馬法』 3卷	『司馬法』 3卷	『田穰直司馬法』 3卷	齊將司馬穰直撰
	『孫子兵法』 2卷	『孫子兵法』 2卷	『孫子兵法』 13卷	『魏武帝注孫子』 3卷	吳將孫武撰、魏武帝注 梁3卷
35 曆數	『孫子兵法』 1卷	『孫子兵法書』 1卷	『孫子兵法書』 1卷	魏武·王浚集解	魏太尉賈詡鈔 魏武帝撰
	『鈔孫子兵法』 1卷	『孫子兵法書』 1卷	『孫子兵法書』 1卷	『魏武帝注續孫子兵法』 2卷	
	『續孫子兵法』 2卷	『續孫子兵法』 2卷	『黃石公三略』 3卷	『黃石公三略』 3卷	下邳神人撰、成氏注
	『黃石公三略』 3卷	『黃石公三略記』 3卷	『許子新書軍勝』 10卷	『王略武林』 1卷	王略撰
	『武林』 1卷	『武林』 1卷	『許子新書軍勝』 10卷	『許子新書軍勝』 10卷	許助撰
	『軍勝見』 10卷	『軍勝』 10卷	『真人水鏡』 10卷	『陶弘景真人水鏡』 10卷	（撰者未詳） （陶弘景撰）
	『陣圖』 1卷	『陣圖』 1卷	『真人水鏡』 10卷	『投壺經』 1卷	（撰者未詳、郝沖·虞譚法撰）
	『真人水鏡』 10卷	『投壺經』 1卷	『象經』 1卷	『郝沖·虞譚法投壺經』 1卷	虞譚法撰
	『象經』 1卷	『象戲經』 1卷	『天文錄』 30卷	『周武帝象經』 1卷	周武帝撰
	『定天論』 3卷	『定天論』 3卷	『天文雜占』 1卷	『祖暅之天文錄』 30卷	（梁·朱史撰） 梁奉朝請祖暅撰
	『天文錄』 30卷	『天文錄』 30卷	『卦孝占』 1卷	『吳雲天文雜占』 1卷	吳雲撰
	『天文志雜占』 1卷	『天文雜占』 1卷	『正曆術』 4卷	『劉智正曆』 4卷	（撰者未詳） 晉太常劉智撰
	『卦孝占』 1卷	『正曆術』 4卷			
	『正曆』 4卷				



	40 總集				
	『文選』 30卷	『文選』 30卷	『文選』 30卷	『梁昭明太子文選』 30卷	梁昭明太子撰
	『陳尚書左僕射徐陵集』 30卷	『徐陵集』 30卷	『徐陵集』 30卷	『徐陵集』 30卷	(徐陵撰)
	10卷	『庾肩吾集』 10卷	『庾肩吾集』 10卷	『庾肩吾集』 10卷	(庾肩吾撰)
	10卷	『劉孝威集』 10卷	『劉孝威前後集』 20卷	『劉孝威前後集』 10卷	(劉孝威撰)
	『梁太子庶子劉孝威集』 10卷			『後集』 10卷	
	『齊金紫光祿大夫孔稚珪集』 10卷	『孔稚珪集』 10卷	『孔稚珪集』 10卷	『孔稚珪集』 10卷	(孔稚珪撰)
	『齊中書郎王融集』 10卷	『王融集』 10卷	『王融集』 10卷	『王融集』 10卷	(王融撰)
	『宋征虜記室參軍鮑照集』 10卷	『鮑集』 10卷	『鮑照集』 10卷	『鮑照集』 10卷	(鮑照撰)
總計	204部 3293卷	204部 3293卷	159部 3063卷	165部 3097卷	
	(11部 170卷)	(11部 170卷)	(11部 180卷)	(11部 180卷)	
	『玉臺新詠』 10卷	『玉臺新詠集』 10卷	『玉臺新詠』 10卷	『(徐陵) 玉臺新詠』 10卷	徐陵撰
	『文心彫龍』 10卷	『文心彫龍』 10卷	『文心彫龍』 10卷	『劉勰文心彫龍』 10卷	劉勰撰
	『文心彫龍』 10卷				

(凡例)

1. 本表は、『隋書』經籍志と『日本國見在書目錄』に掲載された隋代以前の著作で巻数が同じ書籍を取り上げ、『舊唐書』經籍志、『新唐書』藝文志に著録された對應する書籍と書名・巻數等を比較對照できるように一覽表にまとめたものである。なお、隋代には「亡」となっていた梁代の書籍は取り上げない。

2. 備考欄には、主に『隋書』經籍志の撰者名及び注記を記す。なお、注記等が欄内に収まらない場合は、注を附し、以下に記した。また、特記すべき書誌情報を記す場合もある。

注①…「亡」の注記があるが、體例からみて衍字か。また、『日本國見在書目錄』は書名を「禮緯」とするが、「禮緯」の書き誤りと考えられる。

注②…秦相李斯作者頌篇、漢揚雄作訓纂篇、後漢郎中賈魴作滂喜篇、故曰三蒼」という注記あり。

注③…『敘錄』一卷、晉太子中庶子陳壽撰、宋太中大夫裴松之注」という注記あり。なお、『舊唐書』經籍志・『新唐書』藝文志には、『魏國志』・『吳國志』・『蜀國志』と三書に分かれて著録されている。

注④…『二石集、記石勒事』という注記あり。

注⑤…『隋書』經籍志・『日本國見在書目錄』は「釋僧祐撰」とするが、『隋書經籍志詳攷』の校勘により改めた。

注⑥…『記三輔宮觀・陵廟・明堂・辟雍・郊時等事』という注記あり。

注⑦…『七略有九篇、梁七錄十卷。亡』という注記あり。

注⑧…『鄭之隱人列禦寇撰、東晉光祿勳張湛注』という注記あり。

注⑨…『梁漆園史莊周撰、晉散騎常侍向秀注。本二十卷、今闕』という注記あり。

注⑩…『皇甫謐注、鬼谷子、周世隱於鬼谷』という注記あり。

遣隋使が持ち歸つた蓋然性が最も高いものは、『隋書』經籍志と『日本國見在書目錄』にのみ見えて、唐代以降の書目に見えない書籍である。これらの書籍は、隋末唐初に喪われた書籍と考えられるからである。以下に列記する書籍が該当する。

『周易音』一卷・徐邈撰（易家） 『尚書音』一卷・徐仙民（Ⅱ徐邈）撰（尚書家） 『尚書大傳』三卷・鄭玄注或本伏

生注（尚書家） 『周官禮義疏』十九卷（禮家） 『周官禮義疏』十卷（禮家） 『周官禮義疏』九卷（禮家） 『喪服

要略』一卷（環濟撰）（禮家） 『琴經』一卷・蔡伯諸撰（樂家） 『孝經私記』二卷・周弘正撰（孝經家） 『河圖龍

文』一卷（異說家） 『禮緯』三卷・鄭玄注（異說家） 『孝經勾命決』六卷・宋均注（異說家） 『孝經援神契』七

卷・宋均注（異說家） 『孝經內事』一卷（異說家） 『啓蒙記』三卷・顧愷之撰（小學家） 『今字辯疑』三卷・李少

通撰（小學家） 『三國志』六十五卷・陳壽撰・裴松之注（正史家） 『搜神後記』三十卷・陶潛撰（雜傳家） 『列女

傳頌』一卷・劉歆撰（雜傳家） 『三輔故事』二卷・晉世撰（土地家） 『遊名山志』一卷・謝靈運撰（土地家） 『莊

子音義』三卷・徐邈撰（道家） 『隋書』經籍志は『莊子音』 『莊子講疏』八卷・周僕射（Ⅱ周弘正）撰（道家） 『隋書』

經籍志は『莊子內篇講疏』 『孫子兵法』一卷・魏武略解（兵家） 『隋書』經籍志は『孫子兵法』 『孫子兵法書』一卷・

賈詡撰（兵家） 『隋書』經籍志は『鈔孫子兵法』 『陣圖』一卷（兵家） 『定天論』三卷（天文家） 『韋字占』一卷

（天文家） 『婆羅門陰陽算曆』一卷（曆數家） 『遁甲經要鈔』一卷・抱朴子撰（五行家） 『遁甲立成』六卷（五行

家) 『沐浴書』 一卷 (五行家) 『雜藥方』 一卷 (醫方家) 『癰疽論』 一卷 (醫方家) (『隋書經籍志』は『癰疽論方』)

『治消渴方』 一卷 (謝南郡撰) (醫方家) (『隋書』經籍志は『療消渴衆方』)

このうち、特に注目されるのは、最後に挙げた『治消渴方』である。『隋書』經籍志では『療消渴衆方』と表記されているが、『隋書』は唐朝の三代皇帝高宗の諱「治」を避け、療に改めたものと推量される。<sup>(26)</sup>このことは、『日本國見在書目錄』に著録された『治消渴(衆)方』が高宗即位以前に舶載されたものであることを物語る。唐初に舶載された可能性もあるが、隋代の寫本であつたという推定を補強するものと考ええる。

上記の書籍に類するものとして、『隋書』經籍志と『日本國見在書目錄』に於いて卷數は異なるものの書名等が一致し、唐代以後の書目に見えないものがある。『日本國見在書目錄』は抄略本であり、誤脱・誤表記が少なくなく、卷數表記にも誤りがある可能性がある。また、將來本が端本、異本の可能性もある。孰れにしても、唐代以降には存在しない書籍なので、遣隋使がもたらした書籍と推定してよいものと考ええる。

『三禮大義』 三十卷・梁武帝撰 (禮家) (『隋書』經籍志は十三卷とする)

『兵書對敵權變逆順法』 (兵家) (『日本國見在書目錄』は卷數脱す。『隋書』經籍志は『對敵權變逆順』 一卷)

『天官星占』 六卷・陳卓撰 (天文家) (『隋書』經籍志は十卷)

『龍樹菩薩和香方』 一卷・撰者未詳 (醫方家) (『隋書』經籍志は二卷)

これまで挙げた書籍以外にも、遣隋使が將來した蓋然性の高いものがある。表3に於いて、『隋書』經籍志と『日本國見在書目錄』の卷數が一致するが、唐代の書目では卷數が異なるものである。隋と唐で卷數が違うのは隋代の宮廷圖書系の寫本が湮滅し、唐代には異なる寫本系統に変わったためと考えられ、隋と日本の卷數が同一なのは遣隋使が唐代以前に入手したためと考えられる。紙數の関係でここに書名を列挙することは控えるが、表3中に三十五部を数えることができ。また、『隋書』經籍志と『日本國見在書目錄』で卷數が一致するのみならず、唐代の書目とも一致する書籍の中には

遣隋使が舶載したものも含まれている可能性がある。その多くは遣唐使に由るものと思われるが、遣隋使がもたらしたのか、遣唐使がもたらしたのか、という判断は現段階では留保せざるを得ない。

#### (四) 遣隋使がもたらした知識・學術

前節・前々節に於いて、遣隋使が將來したと推定される漢籍について具體的に検討したが、あくまでも外形的な書籍情報に基づく推定であり、目録の誤記・誤脱・未記載の可能性もあり、決して萬全なものではない。しかし、遣隋使がもたらした知識や學術がどのようなものであり、それがどのように生かされたかを考える手懸かりにはなるものと思う。

遣隋留學僧であつた僧旻の學堂では、蘇我入鹿や中臣鎌足等が『周易』を讀んだとされる（『藤氏家傳』上卷・鎌足傳）が、遣隋使が將來したと推定される漢籍の中に徐邈撰『周易音』が見られることが注意される。これ以外にも、表3中の『周易』、『周易論』等ももたらされた可能性がある。また、同じく遣隋留學僧であつた南淵請安の學塾では周孔の教えが講じられたという（『日本書紀』皇極天皇三年（六四四）正月乙亥朔條）が、そこで用いられたテキストも表3の經部や子部儒家類等に挙げた書籍の中に該當するものが存在する可能性がある。また、遣隋留學生歸國後の舒明朝には、突然、彗星・流星に關する記事が集中して見られ、僧旻が流星について解説したことが知られる（『日本書紀』舒明天皇九年（六三七）二月戊寅條）。これについては、表3の天文類の『定天論』、『彗孛占』、『天官星占』等の天文書が着目されるが、とりわけ彗星や流星の解説書と思われる『彗孛占』との關聯が疑われる。<sup>(27)</sup> 僧旻と高向玄理という共に隋に學んだ兩名が、大化改新政府の國博士に登用されたことは有名である。彼等が關與した改新政策の一つとして、それまでの中國南朝系の朝禮である跪伏禮・匍匐禮から隋唐朝系の立禮に改められているが、表1の『隋大業令』の影響が想定される。<sup>(28)</sup>

以上、思いつくまま、遣隋使將來漢籍と遣隋留學者歸國後の出來事との關聯性について述べてみた。留學者が新知識・學術を身に着けて歸るにあたって、何も持たずに歸國したとは考えられず、新知識・學術に關わる書籍を一緒に持ち歸つ

たことは疑い無い。出来事と漢籍との關聯性については更に檢證が必要とはいえ、遣隋留學者のもたらした漢籍がこの時代の政治・文化に大きな影響を與えたことは間違いないであろう。<sup>(29)</sup>

## おわりに

本稿では、書目に記された個々の書籍情報に着目し、時代、または國の異なる書目を比較することにより、宮廷圖書の變化と連續性、同一性について考察した。費やした紙數に比して得られた成果の乏しさには忤怩たる思いがあるが、書籍の存亡・聚散・變貌の歴史を読み解く定點として書目を活用するという新たな研究視點を提示できたのではないかと考える。

書目の比較は、書名・撰者・卷數というごく限られた外形的な情報に基づくものであり、元より誤差は免れ得ない。しかし、現物としての書籍が喪われ、直接そのものを確認しえないという條件の下で、特定の時代の書籍や藏書の内容・性格を推定する方法として一定の有効性をもつものと信ずる。<sup>(30)</sup> 本稿では、隋唐時代及び古代日本の宮廷圖書を檢討對象としたが、他の時代に於いても有効な研究手法と考える。<sup>(30)</sup> なお、寫本と版本では書籍の性格も大きく變わることから、版本の時代となる宋代以降の書目の比較については、今後の課題としたい。

## 註

(1) 井波陵一『知の座標 中國目錄學』（白帝社、二〇〇三年）。

(2) 目錄學に關しては、内藤湖南「支那目錄學」（内藤湖南全集）第十二卷、筑摩書房、一九七〇年、一九二六年講義ノート）、姚名達『中國目錄學史』（上海古籍出版社、二〇〇二年、初版は商務印書館より一九三七年）、余嘉錫『余嘉錫著作集 目錄學發微 古書通例』（中華書局、二〇〇

七年、『目錄學發微』の初版は一九六三年）、倉石武四郎『目錄學』（汲古書院、一九七九年、初版一九七三年）、清水茂『中國目錄學』（筑摩書房、一九九一年）等を参照。なお、余嘉錫の著作の日本語譯注に、古勝隆一他譯注『古書通例 中國文獻學入門』（平凡社、二〇〇八年）、古勝隆一他譯注『目錄學發微 中國文獻分類法』（平凡社、二〇一三年）がある。



- (3) 藤枝晃「文字の文化史」(岩波書店、一九九一年、初版一九七一年)、郭偉玲『中國祕書省藏書史』(武漢大學出版社、二〇一五年)等を参照。
- (4) 『唐會要』卷三十六・修撰等を参照。
- (5) 書の五厄については、『隋書』卷四十九・牛弘傳等を参照。
- (6) 『隋書』經籍志、『舊唐書』經籍志、『新唐書』藝文志等を参照。
- (7) 明・胡應麟『少室山房筆叢』卷一、經籍會通一では、隋以降の書厄も加え、「書の十厄」を記す。書厄や王朝毎の書籍の聚散については、市村瓊次郎「寫本時代と版本時代」とに於ける支那書籍の存亡聚散」(『史學雜誌』一三一・三、一九〇二年)、陳登原『古今典籍聚散考』(華東師範大學出版社、二〇一〇年、初版一九三三年)等を参照。
- (8) 『隋書』卷四十九・牛弘傳等を参照。
- (9) 榎本淳一「遣唐使による漢籍將來」(『唐王朝と古代日本』吉川弘文館、二〇〇八年)を参照。
- (10) 興膳宏「解説」(興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』汲古書院、一九九五年)を参照。
- (11) 中國における關聯研究は、朱意煒「『隋書・經籍志』研究論著目錄」(陳東輝主編『歷代文獻學要籍研究論著目錄』浙江大學出版社、二〇一四年)を参照。日本の主要な關聯研究には、興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』(註(10)の他、清水凱夫『『隋書』經籍志の位相と改訂復元法』(『日本中國學會報』第五十一集、一九九九年)、矢淵孝良『『隋書經籍志衍字考』(金澤大學教養部論集 人文科
- 學篇』二六一二、一九八九年)、古勝隆一「『隋書』經籍志史部と『史通』雜述篇」(『東方學報』八五、二〇一〇年)等がある。
- (12) 内藤湖南「支那目錄學」(註(2))。倉石武四郎『目錄學』(註(2))もこれに従う。
- (13) 余嘉錫『目錄學發微』・『古書通例』(註(2))。
- (14) 徐凌志『中國歷代藏書史』(江西人民出版社、二〇〇四年)、寇克讓『『隋書・經籍志』成書考』(『文史』二〇一〇年第一輯・總九〇輯、二〇一〇年)等を参照。
- (15) 『隋書』の成り立ちについては、中華書局編集部『隋書出版說明』(『隋書』一、中華書局、一九七三年、船越泰次「ずいしよ 隋書」(神田信夫・山根幸夫編『中國史籍解題辭典』燎原書店、一九八九年)、興膳宏「解説」(註(10)等を参照。
- (16) 『新唐書』藝文志・總序には「王世充平、得隋舊書八千餘卷、太府卿宋遵貴監運東都、浮舟沂河、西致京師、經砥柱舟覆、盡亡其書」とあり、全て喪われたとする。『大業雜記』も同様である。
- (17) 註(10)を参照。
- (18) 『新唐書』藝文志の總序には、「而藏書之盛、莫盛於開元、其著錄者、五萬三千九百一十五卷。而唐之學者自爲之書者、又二萬八千四百六十九卷」と記される。この記載に依れば、開元盛期の著錄數から唐代の著作數を引いた二萬五千四百四十六卷が唐代以前の著作數、唐初の書籍數ということになる。なお、『舊唐書』經籍志の總序は、開元期の圖書

目録『古今書録』には五萬一千八百五十二卷が著録されていたと記し、『新唐書』の数値と少し差異がある。

- (19) 兩唐書の經籍志・藝文志を比較したものに楊家駱主編『兩唐書經籍藝文合志』(世界書局、二〇〇九年)があり、『新唐書』には唐代後半の書籍が著録されていることが分かる。

- (20) 興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』(註(10)、池田溫「遣隋使のもたらした文物」(氣賀澤保規編『遣隋使がみた風景——東アジアからの新視點——』八木書店、二〇一二年)を参照。

- (21) 『隋書』經籍志においては、類毎の書籍總數と著録された書籍の實數に差異があることが多い。とりわけ、子部の儒家類と道家類において、類總數に比べ實數がかなり少なく、この部分に底本の目録の闕失があつた可能性がある。なお、法家、名家、墨家、縱横家には大きな差異は無い。

- (22) 『資治通鑑』と同じ内容の記事が、『玉海』卷五十二に『北史』からの引用として見える。しかし、現行の『北史』には、同記事は見えない。

- (23) 興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』(註(10)、九二七頁を参照。

- (24) 寇克讓『《隋書・經籍志》成書考』(註(14)を参照。

- (25) 池田溫「遣隋使のもたらした文物」(註(20)を参照。

- (26) 『日本國見在書目録』には「治癰疽方」、「治婦人方」など「治」字を使用している醫方書名が幾つか見られるが、『舊唐書』經籍志には「療」字があつても「治」字を用いた醫方書は全く見られず、避諱が行われたと想定される。

従つて、「治」が書名に入っている書籍は、唐の高宗即位以前に舶載されたものと考え得る。

- (27) 『隋書』經籍志には「彗星占 一卷」、「日本國見在書目録」には「彗星占 二卷」が著録されているが、書名は同じでも卷數が異なり、異本と思われ、隋代の『彗星占』が日本にもたらされたとは判断し難い。書名・卷數が同一な『彗星占』の方が舶載の蓋然性が高いと考える。なお、吉田一彦「僧旻と彗星・天狗」(『東アジアの古代文化』一三六、二〇〇八年)は、本稿の推定する『彗星占』と異なる依據史料を想定されている。

- (28) 『隋大業令』の篇目は不明だが、朝廷内や官人間の儀禮を規定する儀制令的な規定が存在したと考えてよいだろう。跪伏禮・匍匐禮が南朝系の朝禮であることについては、大隅清陽『律令官制と禮秩序の研究』(吉川弘文館、二〇一一年)、榎本淳一「比較儀禮論」(石井正敏ほか編『日本の對外關係2 律令國家と東アジア』吉川弘文館、二〇一一年)を参照。なお、朝廷内の儀禮ということで、『江都集禮』の影響を想定すべきという意見もあるだろうが、同書は隋代の宮廷儀禮を記した儀注ではなく、南朝宋・何承天撰『禮論』三百卷(『隋書』經籍志では、史部の儀注ではなく經部の禮に分類)を抄撮したものである(『舊唐書』卷二十二・禮儀二)。

- (29) 森公章「遣隋・遣唐留學者とその役割」(『専修大學東アジア世界史研究センター年報』四、二〇一〇年)も参照されたい。

(30) 隋唐時代以外では、梁代について検討したことがある。  
榎本淳一『日本國見在書目録』に見える梁代の書籍につ

いて(榎本淳一編『古代中國・日本における學術と支配』  
同成社、二〇一三年)を参照。

### 〔主要史料典據刊本一覽〕

『北史』・『隋書』・『舊唐書』・『新唐書』・『唐會要』||中華書局標點本

『大業雜記』||辛德勇輯校『兩京新記輯校・大業雜記輯校』三秦出版社

『玉海』||江蘇古籍出版社・上海書店影印本

『日本國見在書目録』||矢島玄亮『日本國見在書目録——集證と研究』汲古書院、及び孫猛『日本國見在書目録詳考』上海古籍出版社

(附記) 本稿は、科學研究費助成事業(學術研究助成基金助成金)に採擇された「日本古代における漢籍の傳來時期に關する研究」の  
成果の一部である。

*Nanqishu* 南齊書. Later historical records, such as the *Tongdian* 通典, inherited the mistake made there, misleading researchers ever since. We must adopt a critical stance toward such historical records.

## A COMPARISON OF CHINESE AND JAPANESE BOOK CATALOGUES (*SHUMU* 書目)

ENOMOTO Jun'ichi

Considering the characteristics of books in the age of manuscripts, I compared and analysed imperial library catalogues of that period, namely the catalogue chapters of the *Suishu* 隋書, the *Jiutangshu* 舊唐書, and the *Xintangshu* 新唐書 as well as the *Nihonkoku genzaisho mokuroku* 日本國見在書目錄. My aim has been to answer two questions: From what period is the bibliographic information in the *Suishu*, and what Chinese books were brought back to Japan by the missions to Sui China (Qiansuishi 遣隋使)?

Heretofore, opinion has been divided as to whether the bibliographic information in the *Suishu* is from the Sui period or from the early Tang period. My comparison of the catalogue contained in the *Suishu* to the catalogues from the Tang period revealed multiple differences between the information recorded in the two types, making it clear that the information is basically from the Sui period. Furthermore, having considered the inclusion of numerous books from the Daye 大業 Era (605–618), I point out the possibility that the catalogue chapter in the *Suishu* is based on the *Daye Imperial Catalogue* (*Daye zhengyushu mulu* 大業正御書目錄).

Next, using the aforementioned result that the bibliographic information in the *Suishu* is indeed from the Sui period, I compared the catalogue chapter in the *Suishu* to the *Nihonkoku genzaisho mokuroku* to estimate which books were brought back from China by the Japanese missions. I made a specific estimation of those books by primarily applying the following categories: books listed in the *Suishu* and the *Nihonkoku genzaisho mokuroku*, but not in the Tang catalogues; books only listed in the *Nihonkoku genzaisho mokuroku*, but clearly from the Sui period; and books whose detailed bibliographic information in the *Suishu* and the *Nihonkoku genzaisho mokuroku* matches, but differs from that in the Tang catalogues. I present my opinion on the matter whilst also giving concrete examples of how the imported Chinese books were later utilised in Japan (Yamato).